

2018 Annual Community-Based Heritage Language Schools Conference への参加レポート

2018 年 10 月 13 日に Washington D.C. で行われた Community-Based Heritage Language Schools Conference (<https://www.american.edu/cas/education/ie/Annual-Community-Based-Heritage-Language-Schools-Conference.cfm>) に出席しました。

参加者はおそらく 100 名くらいで、言語的には、スペイン語の他、フランス語、中国語、ドイツ語などおおよそ 20 の言語を継承語として教えている継承語の先生、学校運営者、および研究者などが参加していました。Plenary Speaker は、CalState Long Beach の Maria Carreira でした。日本語継承語の関係者は、おそらく 6-7 名くらい参加していたと思います。CalState Long Beach のダグラス雅子先生も、オンラインでビデオを通じて発表やパネルへの参加をされていました。

この会議は今回で 5 回目とのことですが、今回からは、ハイブリット (会場に参加する方法と、オンラインでアクセスする方法) の両方が可能になったそうです。世界のどこからでも参加が可能になったとのことですので、遠方にお住まいの方でもオンラインで参加できるようになりました。いざ発表が始まってみると、オンラインの人は質問をディスカッションボードに書いても、会場にいる人たちの質問に返答するだけで時間がたりないので考慮されなかったり、音声やビデオに時折支障があったりと、テクニカルな問題が少しありましたが、ハイブリットという非常に新しい試みをした事を考えると、それは想定内という感じではないでしょうか。

全体的な印象としては、すべての継承語教育学校を対象としていて、非常に幅広い言語や言語教育関係者が参加していて、素晴らしかったと思います。昼食時には、言語別にテーブルが分けられていたのですが、日本語のテーブルの隣は Amharic の継承語関係者で、本当に幅広い言語が継承語として教育されているんだなあと感じました。それぞれの発表に関しては、幅広い言語と学校形態 (週末学校、公立学校、大学、営利目的の語学学校)、対象年齢 (K-16)、継承語教育にいろいろな形で関わる人たち (学校運営者、先生、研究者) を対象としているので、発表 (特に質疑応答の際) が「自分の状況には関係ないなあ」という思いと自分の状況に関係あることでも「具体性に欠けるなあ」という思いが多くあったのは否めません。

以下、時系列にプレゼンテーションの内容や感想を記載します。当日の発表やハンドアウトは、Conference (<https://www.conferize.com/2018-community-based-heritage-language-schools-conference/>) というウェブサイトで公開されているようです。

最初の Prof. Maria Carreira の基調講演は、Project-Based Language Learning (PBL) についての発表で、PBL が年齢や言語能力が異なる学生が一つの教室にいることが多い継承語クラスではとても効果的だという内容でした。その後、ダグラス先生を含む、さまざまな言語の先生方が、それぞれの環境でどのように PBL を実施しているかという事を話していました。

基調講演に続いては、11:00am-1:00pm は、3 つのワークショップの concurrent session で、同じ内容を二度行うので、3 つのうち 2 つに参加できるという形式でした。

最初に、ACTFL の Executive Director の Marty Abbot のワークショップに参加しました。ACTFL の World Readiness Standards, Performance Descriptors, Can-do Statements などの紹介がありました。

二つ目は、ダグラス先生の Seal of Biliteracy の発表に参加しました。Seal of Biliteracy が、日本語とブルガリア語、カリフォルニア州とワシントン州のそれぞれの違うところでどのように実施されているかという内容でした。Seal of Biliteracy は、全州に広まっているけれども、AP や IB などと比べると継承語話者や保護者への知名度が低いので、知名度の向上が第一の課題だとのことでした。また、ブルガリア語に関しては、州全体での参加学校は増加しているけれども、Seal of Biliteracy を取得した学生数は減っている (ブルガリア語) という状況が報告されました。質疑応答では、Seal of Biliteracy

を運営する上で、公立高校にある外国語のプログラムと継承語学校がどのように提携していけるのか、競争愛でなく共存していくことは可能かという議論がありました。詳しい内容は、Conferenze (<https://www.conferize.com/2018-community-based-heritage-language-schools-conference/>) にスライドのコピーがあるので、そちらを参照ください。

昼食は、言語別に分かれてテーブルが設定されており、その際には、いろいろな地域で日本語継承語を実施している人たちとの会話ができました。

昼食後は、継承語教育を支援している団体の代表によるパネルがありました。発表者は、Marty Abbot (ACTFL), Joel Gomez (CAL), An Chung Cheng (NCOLCTL), Maria Carreira (NHLRC), Antonella Cortese (IHLA) で、Jose Viana (OELA, U.S. Department of Education) は欠席との事でした。それぞれの人たちが継承語教育についての話をしたのですが、それぞれの団体が注力している言語、継承語教育に対する熱意などに差があり、それぞれの団体の内情が垣間見得てとても参考になりました。

昼食後の concurrent workshop では、“Engaging Families and Communities” とされる発表に行ったのですが、最初に community engagement の簡単な説明があっただけで、発表時間のほとんどが Students, Teachers, Parents, Community の四つのグループに分かれて自由討論するという形式で、この発表は少し残念でした。ただ、自由議論の前に、話す内容はそれぞれの個々の学校が置かれている状況への文句ではなく、継承語教育全般的に役に立つ建設的な内容を話してくださいという注意があったのですが、午前中の発表の後の質疑応答を聞いていて自分も同じような事を感じていたので、非常によいコメントだと感じました。

そのあとのパネルには電車の時間があり参加できませんでしたが、パネルの後にはレセプションやラッフルなどもあるという事でした。

Conferenze (<https://www.conferize.com/2018-community-based-heritage-language-schools-conference/>) というウェブサイトで、発表のビデオなどは公開されるということですので、当日参加できない人にも有益なリソースになるのではないかと思います。

レポート作成者：永野友雅（ニューヨーク市立大学ラガーディアコミュニティーカレッジ）
<tnagano@lagcc.cuny.edu>